平成２２年度　日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立田尻小学校　教諭　椎名正隆

１　派遣期日　　平成２２年８月４日（水）
２　研修先　　学校名　　筑波大学附属小学校
　　所在地　　東京都文京区大塚３－２９－１

３　研修内容
（１）研究主題
「今，求められる国語授業力」
～読解力を育てる　文学・説明文の発問づくりと対応力～
（２）研修内容
①研究主題について
授業は，教師が子どもとかかわり合うことで成立する。文学の授業では，教師は子どもとかかわり合いながら，作品の一番いいところ，作者が読者に伝えようとしているメッセージ（テーマ）に導いていく。発問は子どもとのかかわるかかわり方の一つであり，対応力とは，教師の関わりに対してさまざまに反応する子どもを受け入れ，テーマにうまく導いていく力である。
大切なのは，教師はいろいろなかかわり方で子どもそれぞれの個性を引き出し，そのときどきの子どもの考えを受け入れながら，子どものたちをねらいのもとに導いていくことである。決して教師の考えを押しつけない。
授業における教師のかかわり方の分類
ア　教えること
（例）「カギ括弧がなかったら，語り手の言葉を考えましょう」
イ　モデリングすること（お手本を示す）
（例）「先生がためいきをついてみるね。こんなためいきだったかな？」
ウ　足場をかけること（子どもを作品の核心に導くために手助けする）
（例）「なんでとっくりがからっぽなのに怒らなかったのかな？」
エ　ファシリテーティング（簡単なアドバイスで学習効率を高める）
（例）「となりの人と話し合ってごらん」
オ　参加すること（教師が子どもの学習活動に対等の立場で参加する）
（例）「先生だったら油をなめたら怒るけどなぁ」
②読解力を育てるために（どのような授業展開があるのか）
ア　言いたいことは最後にある
説明的な文章でも，文学的な文章でも，テレビドラマでも，作品といわれるもので言いたいこと，大事なことは，必ず最後にある。そうしないと作品は不安定になる。そこをきちんと教えたい。
イ　関連する部分を見つける　その１
読解力の弱い子は，課題に関わる関連部分が見つけられないまま，荒っぽくまとめてしまっていることが多い。
課題に関する叙述部分を見つけるための力をつけるには，傍線を引くなどの書き込み作業を含めて記述活動させることが大切である。そのうえで，関連部分が見つけられない子どもに，教師が意図的に関連部分を再度読ませる方法がよい。
ウ　関連部分を見つける　その２
関連部分を見つける力をつけるために，読み取りの授業では，対話場面のある授業作りに心がけたい。対話場面の演出は，教師が問い，子どもたちが自問自答しながら話し合い，それに対して，また教師が問うていく授業である。まずは教師主導の展開である。特に文学では，「どこに書いてあるの？」と叙述に即した発問をする。「ああ，そこに書いてあるんだね。」「ああそこからもわかるんだね。」という教師側のレスポンスも大事になる。そのあとに，「どうして」と中身を問う発問をする。物語の場合，心情に迫る発問が多くなる。そして，さらに「それがどうつながるの？」「どこにつながるの？」

と問い，再度文章に立ち戻らせ，追求させる。

エ　徹底して読む。幅広く読む。目的を持たせて読む。

文学的な文章や説明的な文章をとにかく幅広く読ませたい。そして，限られた授業時間の中で行う場合は，特に目的を持たせて読ませたい。一つの課題を設定し，たくさんの資料を使った調べ学習をグループ単位で行う方法も有効である。「ここにこう書いてあるからこうじゃない。」といった子に，でも「ここにはこう書いてあって，こっちの方が有力じゃない。」のように話し合わせる方法である。

オ　教師は鍛える

教師は鍛えることをひるまない。しかも，バランスよく鍛えることだ。例えば文学的な文章の場合，鍛えようと思うあまり，教師の読みを押しつけてしまってはなんにもならない。おもしろさが半減してしまう。子どもたちの読みを聞いて，まずは教師が受容する。そして，さらに，そこで読みを終わらせず，その子の心に波紋を広げるような問いかけをする。子どもの意識の中ではエンドレスのままで，教材を終えることになってもいい。そのような営みを繰り返し行えば，何度も文章に食いついてくる。

③説明文を好きに育てる授業づくりの工夫（説明文好きな子を育てるためのポイント）

ア　教師自身の説明文苦手意識をなくそう

「説明文の教材解釈は難しい」とか「説明文はどうも山場が作りにくい」などと，説明文指導に苦手意識をもっていないか。校内研修会の提案授業に選ぶ題材が，物語文に偏っていないか。説明文が苦手なのは，実は子どもではなく，教師自身なのかもしれない。気軽に研修する機会を増やす。

イ　子どもたちの読書の幅を広げよう

子どもたちは，物語を読むのが好きですが，生活科や理科，あるいは，社会科や総合的な学習で調べ学習ををする際など，様々なジャンルの図鑑や資料を読むのが大好きである。日常的に，もっと子どもたちが様々な科学読み物や報告文，図鑑，新聞記事等に出会えるように，積極的に環境を整え，各教科の学習内容に合わせて読み聞かせやブックトーク等を行い，読書の幅を広げる取り組みを行うようにする。

ウ　「教材を教える」から「教材で教える」へ授業観の転換をしよう

要点や要旨をとらえさせることが最終目標のように考え，何年生でもどの教材でも画一的な説明文指導をしているとしたら，子どもは飽きてしまう。その教材の特性を生かし，子どもたちの発達段階を考慮に入れ，その教材でつけたい力を明確にして，単元構想を立てる。

エ　つけたい力の系統性を意識して，授業づくりをしよう

「自分の学年の指導だけで精一杯」と感じるときほど，かえって他学年の教室の様子や教科書が進むべき道筋を示してくれる。６年間あるいは中学校までを視野に入れた９年間の流れの中で，この単元はどのような位置づけにあり，どの学習と前後につながっているのか，明確に子どもたちに示すことができるよう準備し指導にあたる。

オ　「参加型・発信型」の授業になるよう授業展開の工夫をしよう

正確に読み取らせたいという願いが強いあまり，子どもたちを受け身にさせていないか。子どもたちは，十分子どもたちと対話したり，書いたりする活動を通して，自分の考えを表現し深めることができているか。子どもたちが「考えたい」「考える必要がある」と感じる課題を提示し，発問を吟味し，参加型・発信型の授業を組み立てる。

４　感想

・公開授業前における教材検討会では，参加者が小グループになり，本授業をどのように展開し，目標を達成させるのかについて，様々な意見交換を行った。このような場を持つことにより，公開授業に対して能動的に関わり，授業者の発問・対応についてより緊張感をもち，参観することができた。

・午後に行われた教材研究ワークショップでは，多くの先生方の実践例についての報告がなされ，どのように読解力をつけていくのかについて研修を深めることができた。また，各学校の情報交換の場にもなり，様々な悩みや苦労話を聞く機会を得ることができた。

・筑波大付属小で研修した内容を校内に少しでも生かしていけるように努めていきたい。